



釈神之滝

国道三六五号線、草野川北詰を東にとり、川沿いを上ると、草野谷に入る。その中心的な集落「野瀬」。近江バスの停留所がある「角治商店」を東に折れると、農協をばさんで道が二つに分かれている。

右大吉寺道の道標にしたがい、真宗光福寺と下之森神社のあいだを登ってゆく。このあたり、秋は絶景である。

野瀬のはずれにあたる通称「オクデ」をぬけて、道は山道となるが、舗装された道である。杉木立の中を、車なら五分とたたためうち大占寺に着く。

平家物語にも登場するこの天台宗寺院は、貞観九年（八六七年）僧安然によって創建された。平治の乱（一一五九年）で敗走した源義朝、頼朝が難を逃れ、隠れ家としていた寺でもある。南北朝期には、足利氏の祈禱所として、堂塔一〇〇坊の大寺だったが、天正年間兵火にあい、一坊を残しすべて焼失。その一坊が、大占寺である。

釈神之滝は、この大占寺をはさみ、左手の沢筋を登ること一五〜二十分の位置にある。

高さ六〜七メートルの小さな滝だが、水量も豊富で、涼感にあふれている。せせらぎには、天然のワサビが自生し、巨岩がせまわり、周囲は歴史のロマンに満ちている。

メモ 近江バス「近江高山」行で野瀬下車。徒歩約二十分で大占寺へ。釈神之滝へはさらに十五〜二十分。車は、大占寺まであがる。

うるしが滝

霊仙山は、本誌先月号の「湖北グリーン回廊」で紹介されたので、呼んだ人はよくご存じ。鈴鹿山系のいちばん北にあるお鍋をひっくりかえたような山だ。

うるしが滝は、その霊仙の中腹にある。幾千本もの透明の糸が下りるようになり、滑らかに岩を流れ落ちる様はとも女性的だ。大きな滝壺の周囲には、カエデやミズナラなどが多く、新緑や紅葉の季節はひときわ美しい。

都が平城京に移った頃の話である。この山のうしろに、霊仙寺という寺院が建立されたという。ふもとの枝折という小さな集落で生まれ、霊仙

寺で修行した若き学徒僧がいた。彼は、空海や最澄らとともに遣唐使として中国の長安に渡った。空海や最澄は早く帰って、比叡山や高野山で一派を成したが、彼は修業に没頭し、やがて「三蔵」という中国仏教最高の称号を与えられ、霊仙三蔵と名乗った。彼は、中国仏教のメッカ五台山で亡くなり、再び日本に帰ることはなかったという。

うるしが滝の名は、霊仙三蔵を生んだ母「うるし」が、この滝で身を清めて子宝を授かったことからついたという。

メモ JR 醒井駅、米原駅から醒井養鰯場行きバスに乗り、木影の里上丹生で下車。うるしが滝まで約一時間半。うるしが滝から、霊仙頂上までは一時間。

青竜の滝

国道二一号を米原インターそばのT字路で折れ、摺針峠に向かって中山道を行く。番場の宿に至る山すその路には、美しく並ぶカエデの古木が涼しげな緑陰を作っている。

番場の家並みがとぎれるところから左に折れ、ずんずん山の中へ入って行く。急な山道をずいぶん登り、湖北一帯やびわ湖が眼下に望めるようになった頃、突然滝が現われる。

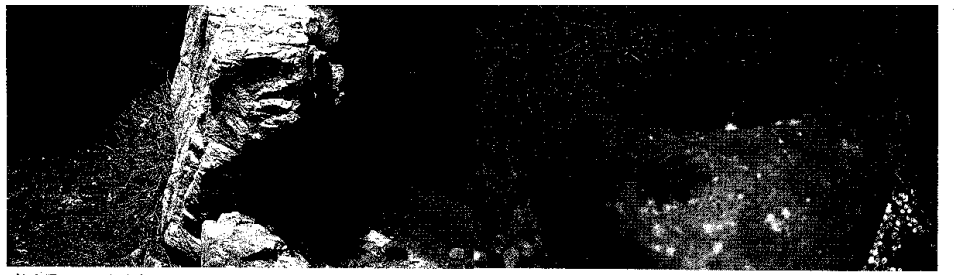
この滝が青竜の滝で、高さは七〜八メートル。両側に山がせまっているため、滝の幅は狭い。滝つぼに向かってまっすぐに水が落ち、



あたりの風景と一体になって清楚で荘厳な雰囲気を感じさせる。その名が示すとおり、滝を祭った祠や朱塗りの鳥居が滝の近くに建てられ、毎年七月二十四日には滝まつりが開かれている。滝口には、苔むした石仏がひっそりと立っている。

付近に鎌刃城と呼ばれる鎌倉時代の城跡があり、かつては青竜の滝の滝口から水の手が城内に引かれていた。滝を眺めていると、そんな歴史にタイムスリップさせてくれる。

メモ 車で国道二一号米原インター忠太郎食堂角を南下、番場南端で左折し、山道を約一五分。



鉢の乗っていた土台

手水鉢

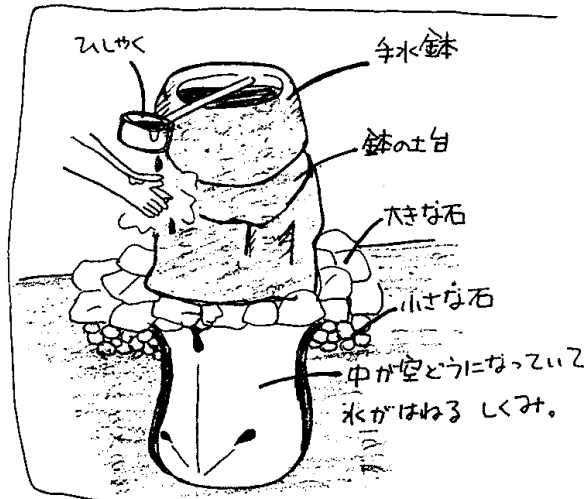


地の中から妙なる音
小谷城があった頃、北国街道の脇往還にある湖北町の郡上は城にも近く、武将の邸が多くあったところ。小谷城主浅井家の家臣で、当時は長政公も立ち寄られたという速水さんの邸。現在はその頃の面影の一部をとどめるだけですが、庭に面した邸の縁側の下に「水琴窟」という、文字どおり水の琴が水面のし

たにあり、水の音を静かに楽しんでいたという事です。
直径五〇センチ位の壺を地面の中に埋めて、その下に石を敷き、上から水滴を落とすと音が壺の中で反響して、なんともいえない幽玄なサウンドが地面の下から聞こえてくるという仕掛けだといひます。

当時でも、地上ではその仕掛けは見ることも

水琴窟のしくみ



はできませんが、水滴を落とす穴の横に手水鉢があり、縁先で手を流した水が、下の水琴窟に落ちて妙な音が聞かれたそうです。今では地元の郡上で採れたという梨目石の手水鉢があるだけですが、庭と縁先のたまたまに、かすかに風流の面影をとどめるだけです。
一角をまわった隣の部屋では、縁側に置風呂をしつらえて庭を眺め、檜の先を通して渡る風を肌を受けての湯遊びをしました。鳥の声にまじって時折聞こえてくる水琴窟の妙な音。今ではとても考えられない人間離れのした境

地が、その頃の生活にはありませんでした。
高度技術や経済成長はなんのためなのか。折にふれて単純な疑問をたくなりありますが、便利だけは昔と比較できないくらい恩恵を受けていますので、せめてその中でもう一度遊び心を復活してみたいものです。

屋敷の中に湧き水

集落のいたるところに湧き水が出ている近江町の世継。地元の人「かなぼう」と呼ぶ道端の水場は収穫した野菜を洗ったり、農機具や手足を洗ったりで人が集まります。時にはご婦人たちの情報サロンとして賑わいます。
一方北陸線の坂田駅のある宇賀野町の「帯も湧き水の多いところ。その中に竹やひばなどのうっそうとした垣で囲まれた一角があります。昔れ高い妻でよく知られる山内一豊の田君

が住んでいたといわれる長野さんの邸です。

草葺きの門を入ると畠の横に水路があり、その先に水屋がしつらえてあります。ちょうど住居の出入口の向い側にあり、鍋や釜や野菜などを洗うのに好都合にできています。

その流れに沿って邸の中の藪を奥の方へ分け入りますと澄んだ水をたたえた水溜りがあり、底から小さな砂を噴き上げて水が湧いています。地面から出てきたばかりの水の中を小魚がすばやく、鯉がゆうゆうと泳いでいるのが見られました。

湧き出した水は、邸の中を回遊して座敷の前の池を巡り、水屋を抜けて外に流れ出ていきます。

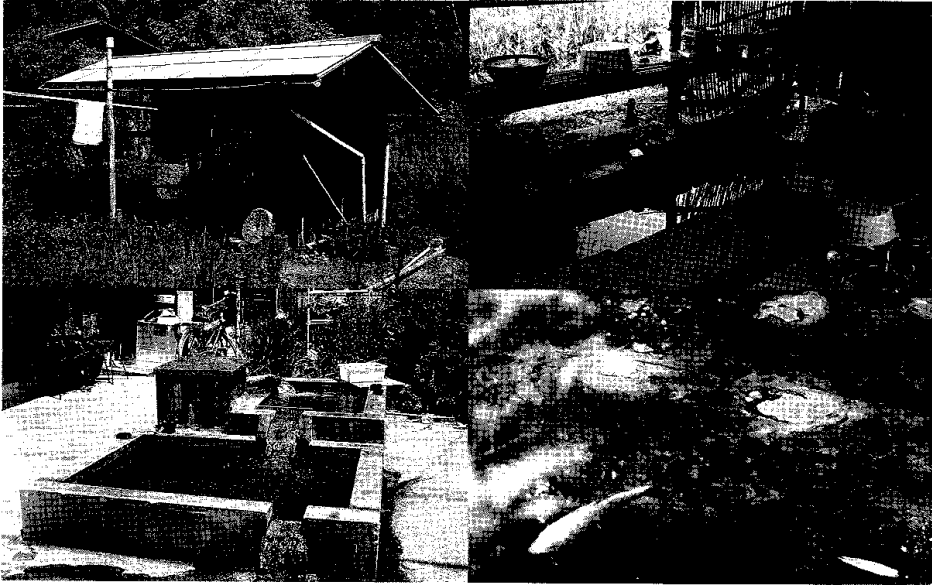
屋敷の中の水源は、先祖代々数百年も絶えることなく、今なお流出しています。昔は、座敷で茶を飲み、訪れる鳥を友とする生活がありました。

上から下に水が流れるのと同じく、人生も一方通行の時の流れにはさかえません。縁先から自然の風流に遊ぶのも、一方で人生を見つめる時なのかもしれません。「ゆく河の流れはたえずして、しかももとの水にあらず；」と鴨長明が記した心境に近づけるような流れです。

座敷の前の池には中の島もあり、今では荒れていますが、昔はさぞ手入れされて美しい自然と静かな人生の対話がみられたことでしょう。

水小屋の中。ここで野菜を洗ったり洗たくをする。

自噴池を利用して建てらた水小屋



近江町宇賀野の自噴池

近江町世継の「かなぼう」

風流とは風と水のこと
風が心地よく、水の流れがすがすがしくとは風流の条件であり、風流そのものだとすれば都会では中々風流生活は望みません。
雨森芳洲で名高い高月町の雨森地区では、家並みに沿って水が流れ、ところどころに水車が廻って水の音をたてています。
美しい水と水車は、その地区の人たちの風流志向がうかがえて道行く人たちのなごませます。
町があってそこに人が住んでいるかぎり、住み方があるはずで、住み方の中に風流が感じられると人は安心します。
雨森地区はそんなところ。
美しい流れと水車と水辺の色とりどりの花は、住むところとしては最高でしょう。

水の音にはせせらぎの音、水の落下する音などありますが、水を利用して出す「ししおどし」の音もあります。静かな山あいに、ある間隔をおいて聞こえる甲高い響は、逆に山の静寂を一層つくよ感じさせます。
米原町番場にある蓮華寺の庭には、山からの水を利用して「ししおどし」の仕掛けがあり、周囲の状況によく合ってよい空間と時間を演出しています。

美しい水の流れはプライスして（かけがない価値）のもの。そしてその水で遊ぶ人生はだれも望むところです。
湖北は、美しい水が日常のところ。そして昔からあった水野遊びを今もなお楽しめるどころです。